The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	中国と日本の変身譚の歴史的変遷に関する考察 ：狐、蛇、虎、犬、亀を中心に
Author(s)	王, 貝
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/55711
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　王　貝　　）	
論文題名	中国と日本の変身譚の歴史的変遷に関する考察 ――狐、蛇、虎、犬、亀を中心に――

論文内容の要旨

日中両国において、動物が人間に変身する、もしくは人間が動物に変身する（以下、変身の方向を矢印で示す）、いわゆる「変身譚」は、古くから数多く語られてきた。変身譚には、その話が誕生した時代の文化や思想が反映されており、文化や思想の通時的な変化の影響を受けながら、変身譚も時代とともに変遷していく。人間と動物との間の変身譚が登場してから、歴史的にどのような変遷があるのか、また、日中両国の変身譚には、どのような共通点・相違点が存在するのか、さらに、日中の変身譚の変遷に影響を与える文化や思想的要素にはどのような共通性と異質性があるのか、これらの問題を明らかにするためには、変身譚の歴史的変遷に関する考察が極めて重要だと考えられる。そこで、本論文では、中国の先秦時代から清代まで、日本の奈良時代から江戸時代までに書かれた狐・蛇・虎・犬・亀（亀類）の変身譚に関して、まず、データベースなどをもとに調査を行い、その結果に基づいて、前述の５種の動物に対して、性別の割合、変身の目的・理由、変身の条件などの角度から日中両国における変身譚の歴史的変遷について考察を行った。さらに、日中両国の変身譚の比較を行い、歴史的変遷に影響を与える、中国と日本の文化的要素についてその共通性と異質性を明らかにした。

以下、本論文の各章の内容を簡潔に述べる。

第１章では、本論文の研究背景と研究目的、研究対象を絞るための予備調査、および研究方法について記述した。また、本論文の情報源となるデータベースおよびその他の書籍資料について説明した。

第２章では、先行研究をまとめ、本論文の位置づけを明らかにした。従来の変身譚に関する研究の不足点として、①日中の比較研究がほとんどなされていない、②変身譚の通時的な研究が少ないという２点が挙げられる。本論文では、変身譚に対して通時的に考察した上で、日中比較を行った。

第３章では、中国と日本の狐の変身譚について、①狐が変身した人間の性別の割合、②狐が人間に変身することができる条件、③狐の人間味が描かれた話の変遷という３つの角度から、時代ごとに考察を行い、それぞれの特徴を比較した。まず、変身後の性別について、中国では、唐代以前の狐の変身譚は、『詩経』に見られる、女を追う男と雄狐とを結びつける記述の影響を受け、男性に変身する話が多かった。宋代以降、女の色香に溺れてはいけないという「女色禁忌」の思想の影響力が強まったことにより、女性に変身する話の割合が高くなった。日本では、奈良時代に民間に流布していた、「狐妻」の狐を一族の始祖とする伝承、および平安時代に日本に移入された、狐が女性に変身して男性を惑わす中国の話に影響され、狐は最初から基本的に女性と結びつけられていた。変身の条件について、中国では、各時代を通じてもっとも影響を与えたのは、「物老為怪（長い年月を経たものは怪異を為す）」の考え方である。日本では、「物老為怪」の考え方の影響も見られるほか、仏教の影響を受けた、念仏の功徳という独特な変身の条件が存在する。人間味の描写については、中国では、時代が下るにつれ、狐の人間味が描かれた話が増加している。日本では、狐の変身譚が初登場した平安時代に、すでに人間味のある狐が描かれている。これは、奈良時代に存在した、狐を始祖とする伝承、および、中国の唐代の狐の変身譚に影響されたためだと考えられる。

第４章では、中国と日本の蛇の変身譚について、それぞれ「蛇→人間」と「人間→蛇」という２つのパターンに分け、「蛇→人間」に対しては、①変身後の性別の割合、②蛇の妖力の増加・神格化と神格の喪失、③変身の目的という３つの角度から、「人間→蛇」に対しては、①変身前の性別の割合、②変身の理由という２つの角度から時代ごとに考察を行い、比較した。まず、「蛇→人間」のパターンにおいては、中国では、五代以降、蛇はほぼ女性に変身するようになったのに対し、日本では、男性に変身する割合が圧倒的に多い。妖力・神格の変化については、中国では、蛇を祖先とする原始時代の信仰が弱まったこと、また、蛇の妖力を抑える宗教の力を誇示するために、蛇の妖力が強調されるようになったのに対し、日本では、奈良時代には蛇神が存在したが、蛇信仰が狐信仰に

取って代わられたこと、また、動物は畜生道に属するという仏教思想に影響され、蛇の神格は喪失した。蛇の変身の目的については、男女の交わりが主な目的である点においては、中国も日本も共通している。次に、「人間→蛇」のパターンにおいては、変身前の性別について、日中ともに特に傾向が見られない。変身の理由については、両国ともに「悪事の報い」による変身が主な理由であるが、日本では、それ以外に、執着や怨恨による変身の話も多い。

第５章では、中国と日本の虎の変身譚について考察を行った。調査の結果、日本独自の虎の変身譚は存在しないことがわかった。そこで、本章では、中国における虎の変身譚を中心に考察を行い、日本の虎の変身譚については、浅井了意著『新語園』に翻訳された中国の虎の変身譚を中国のもとの話と比較し、選ばれた話の特徴について考察を行った。中国の虎の変身譚について、「虎→人間」と「人間→虎」という２つのパターンに分け、時代ごとに考察を行った。まず、「虎→人間」のパターンにおいては、男性に変身する場合が圧倒的に多い。女性に変身する話は魏晋南北朝に流行した動物が女性に変身して人間の男性と付き合うというモチーフの影響を受けた。変身の目的は多岐にわたるものの、主な変身の目的は男女の交わりである。また、虎と人間の付き合いの度合いから見ると、魏晋南北朝以降、虎と人間との距離が近づいてくる傾向が見られる。次に、「人間→虎」に関しては、変身前は男性であった割合が各時代を通して圧倒的に多い。変身の理由は神罰がもっとも多い。虎になった人間が再び人の姿に戻る方法としては、①術を使う、②虎皮から脱する、③特定の人を食うという３つの方法が挙げられる。日本では、人が虎に変身する原因が明示された話、特に漢代に出現して久しく流布した、病気による変身の話が多く選ばれていることを明らかにした。

第６章では、犬の変身譚について、まず、日中両国のそれぞれの特徴について考察し、その上で比較を行った。その結果、日本の「犬→人間」の変身譚は、中国から影響を受けていないことがわかった。その原因は、奈良時代・平安時代において、犬を祖先とした氏族の勢力が強くなく、また、犬が祖先崇拝の対象として重んぜられなかったため、犬の変身譚を受け入れる基盤が存在しなかった点にあると考えられる。

第７章では、亀（亀類）の変身譚について、まず、日中両国それぞれの特徴について考察し、その上で、日中比較を行った。日本の亀の変身譚は中国の亀の変身譚から直接的な影響を受けてはいないものの、中国文化における亀の瑞祥のイメージや神仙思想に大きく影響されている。また、日本においては、「人間→亀」の話が存在しない。これは、日本で早い時期から定着していた亀の「長寿」などの中国伝来のプラスイメージと、日本で人間が動物に変身するパターンの基本となる「畜生道に堕ちる」という仏教的な思想とがかみ合わなかったためではないかと考えられる。

第８章では、日中の変身譚について横断的に考察を行った。まず、特に異なる要素①中国の狐の変身譚に独特の要素「内丹」、②中国の虎の変身譚の特徴である虎皮の脱着による変身という２点について考察を行った。また、すべての動物に関して、①動物が女性に変身する話、②「動物→人間」「人間→動物」両パターンの割合、③仏教要素が織り込まれた話の割合という３つの角度から、日中における動物の変身譚の歴史的変遷の特徴を比較した。その結果、まず、動物が女性に変身する話について、中国においてもっとも影響を与えたのは、「女色禁忌」の観念であることがわかった。「女色禁忌」の観念は、男性が封建社会において倫理規範の担い手であり、高い地位に立つ男性は高い倫理意識を持たなければならないという考え方から形成されたものであり、宋代以降、この観念が強化されたことは、儒教の影響力の拡大と関連性があると考えられる。それに対し、日本には、歴史的に中国のような「女色禁忌」の考え方が存在せず、女性に変身した動物が男性に危害を加える話は、中国の変身譚の影響を受けて、成立したことがわかった。次に、中国では、「動物→人間」のパターンが多く、日本では、「人間→動物」のパターンが多い。このような違いが生じた原因として、以下のことが考えられる。中国の場合には、古来から、動物から人への方向の変身が基本であった。さらに、儒教の合理的・現実的精神の影響下、人間に変身の能力があるという話は受け入れがたかった。日本の場合には、「動物→人間」の変身譚の多くが仏教説話であり、「罪業によって畜生道に堕ちる」という仏教の戒めを伝えるために、人間が動物に変身する話は布教の道具として便利に利用されていた。最後に、中国と比べ、日本の変身譚に仏教要素が織り込まれた話の割合が多いことがわかった。これは、日本が外来文化である仏教を積極的に受け入れたのに対し、中国では、仏教伝来以前に古来の文化が定着しており、外来文化に対して受動的な姿勢を取る傾向が強かったためである。

以上のように、本論文では、日中両国の狐・蛇・虎・犬・亀の変身譚の歴史的変遷を比較、考察することを通して、変身譚の歴史的変遷に影響を与えた中国と日本の文化的要素の共通性と異質性についても明らかにすることができた。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　王　貝　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
主 査	教　授	坂内　千里
副 査	教　授	中　直一
副 査	准教授	大谷　晋也

論文審査の結果の要旨

王氏の学位請求論文は、人間と動物の間の変身の物語（以下、変身譚）のうち、狐・蛇・虎・犬・亀(類)に関わる変身譚を、中国については先秦時代から清代まで、日本については奈良時代から江戸時代までを対象に、その歴史的変遷を考察し、更に日中両国の変身譚の比較を行い、その歴史的変遷に影響を与えた文化的背景について考察したものである。

本論文は、全8章から成る。第1章・第2章は、研究目的、研究対象を上記5種類に絞った理由、調査対象とした資料、変身譚を通時的に研究する必要性など、本論文の基本的立場について述べる序論となっており、第3章から第7章までは上記5種類の動物の変身譚それぞれについて考察する各論であり、第8章は、それらの分析に基づいた総論となっている。各変身譚は、先ず動物から人への変身（以下、「動物→人」）と、人から動物への変身（以下、「人→動物」）の２つのパターンに分けられ、中国及び日本の変身譚それぞれについて、変身前(後)の性別、変身の目的・理由・条件など様々な視点から分析され、また日中の比較が行われている。第３章は狐の変身譚、第４章は蛇の変身譚、第５章は虎の変身譚、第６章は犬の変身譚、第７章は亀(類)の変身譚についての考察となっているが、狐の変身譚に於ける「人→狐」のパターン、日本独自の虎の変身譚、日本に於ける「人→亀」のパターンは、その例が全くないか極わずかであるため、それ以外の場合のみを分析対象としている。第８章では、第３章から第７章で明らかにされた各動物の変身譚の特徴などを踏まえ、５種類の動物に共通する特徴について日中両国の比較を行っている。その結果、(1)動物が女性に変身する話は、中国では「女色禁忌」の観念の形成・強化につれて、その変身譚も女性に変身した動物が交わった男性に危害を加える方向に変化し、その数も増加したこと、また日本に於いては、女性に変身した動物が男性に危害を加える話は中国の変身譚の影響を受けて成立したことを明らかにした。(2)中国では、「動物→人」のパターンが多く、日本では「人→動物」のパターンが多いという違いがあることを明らかにし、その違いを生じた原因は、中国古来の自然観(『荘子』「至楽篇」)では「動物→人」の方向が基本であったのに対し、日本では、「人→動物」の変身譚は大部分が仏教説話であり、「罪業によって畜生道に堕ちる」という仏教の戒めを伝えるものであったことだと論じている。(3) 変身譚に仏教的要素が取り入れられた割合は、中国より日本の方が高いことを明らかにし、その原因として、中国では仏教伝来以前に既に固有の文化が定着していたこと、及び外来文化の受け入れに積極的な日本と受動的な中国という姿勢の違いを挙げている。その他、特定の変身譚にのみ表れる特徴として、中国の狐の変身譚にのみ表れる「内丹を錬成する」という目的、及び中国の虎の変身譚にのみ表れる「虎皮」の着脱による変身の方法についても、併せて考察している。

本論文は、データベースなどを利用し、古代から近代（近世）に至るまで複数の動物の変身譚を収集し、その大量の資料を時代順に丁寧に整理し、多くの視点から通時的にその変遷を明らかにした労作である。特にその歴史的変遷を大量のデータに基づき数量的に明らかにした点は、他に類を見ない研究で高く評価できる。歴史的変遷という現象面の記述には見るべき点が多い反面、そのような変化を生じた原因や、日中の相違を生じた原因などの考察は、表面的なものに留まる点が散見されるなど、若干の課題はある。しかし、それらは本論文の価値を損なうものではない。

以上により、本論文は、博士（言語文化学）の学位論文として価値のあるものと認める。

なお、本論文について、チェックツール“iThenticate”を使用し、剽窃、引用漏れ、二重投稿等のチェックを行い、問題がなかったことを付け加える。